

西大寺跡 第25次調査の成果について

奈良市埋蔵文化財調査センター 久保 邦江

I. はじめに

「海の道 伝えた青」(2009年7月4日朝日新聞)。「石上宅嗣の官職木簡」(2009年12月4日奈良新聞)。「皇甫」膨らむ人物像」(2010年4月9日読売新聞)。これらは2009年に実施した西大寺跡第25次調査の成果について報じる新聞の見出しである。日付からもわかるように、3回の報道発表をおこなった。最初の記事はイスラム陶器の出土に関するもの。二番目は石上宅嗣の官職が記された木簡の出土。三番目は唐から来日した「皇甫東朝」の名が記された墨書土器が出土したことである。それぞれ大きく取り上げられ、特にイスラム陶器の出土に関しては、海外メディアから取材を受ける程であった。

多くの方々の協力を得、2013年に成果をまとめた報告書を刊行することができた。また、昨年2022年にはイスラム陶器が奈良市指定文化財(考古資料)となった。

この度、西大寺の重要性を再認識する講演会にかかわる機会をいただいた。調査から14年経過し、記憶も薄れつつあるが、改めてこの調査を振り返りその意義について考えてみたい。

調査地は、近鉄大和西大寺駅の南西、奈良市西大寺新田町に所在する。平城京の条坊復元では、右京一条三坊十三坪と十四坪の坪境に位置し、奈良時代後半の西大寺造営以後はその境内地に含まれる。宝亀十一(780)年成立の『西大寺資財流記帳』をもとにした西大寺の伽藍復元では、一条三坊の南西隅となる十三坪に西南角院、その北側の十四坪に十一面堂院を推定する復元案があり、この場合、調査地は西南角院と十一面堂院の境界付近になる。

西大寺は塔跡を中心に鎌倉時代に復興した現在の境内地を除き、1970年代以降、その旧境内は急速に市街化が進んでいる。近鉄線路北側においては、食堂院の発掘調査、現西大寺の北方における薬師金堂跡、弥勒金堂跡の発掘調査等が市街化と建築物建替えの間隙で実施され大きな成果をあげている。今回の調査地も、現在の西大寺境内の西側の住宅地内にわずかに残されていた畑地であったが、住宅建設が計画されたため、建設に伴う事前調査として発掘調査を行った。

調査は2009年4月8日から7月14日まで行った。調

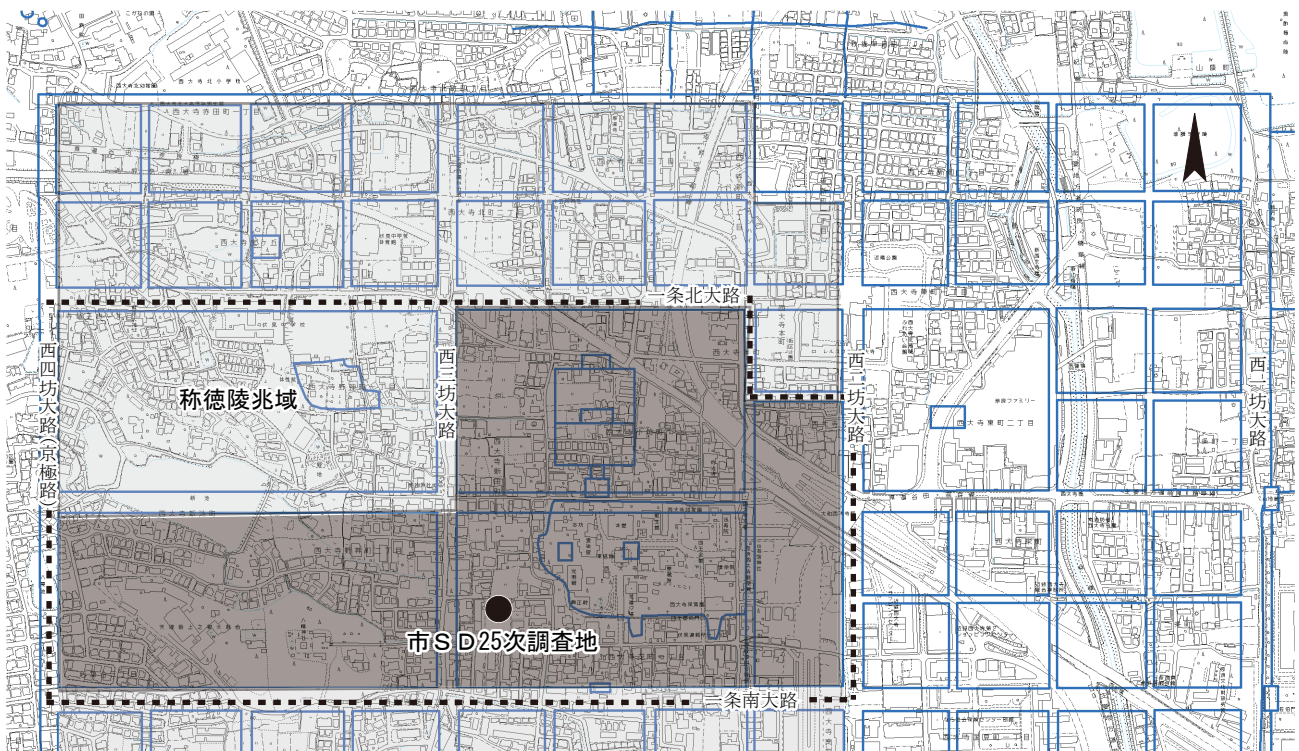


図1 西大寺の占地 (1/10,000)

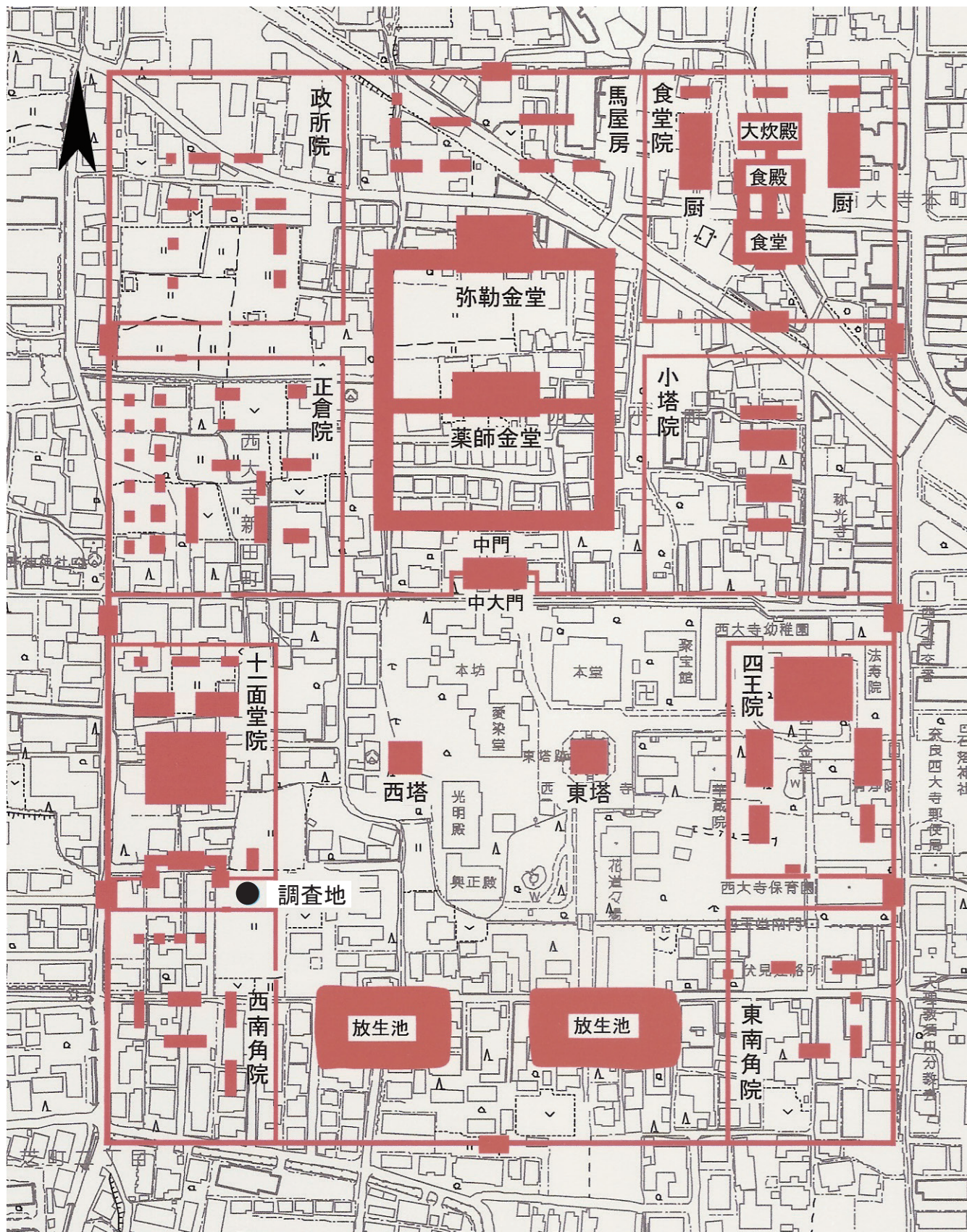


図2 西大寺主要伽藍復元案 (1/2,500)

査は南北 12 m（一部 6 m）、東西 32 m の発掘区より開始し、その後、調査区南側を可能な範囲で拡張したため、最終的な調査面積は 321 m² となった。

その結果、条坊道路側溝を踏襲したとみられる西大寺境内を区画する東西溝を検出し、溝内堆積土層から、現状では国内最古の出土例に位置づけられるイスラム陶器片、西大寺造営に関わるとみられる木簡等の遺物が出土した。西大寺造営の一端を知ることのできる新資料といえる。以下、検出遺構と主要な出土遺物について紹介したい。

II. 検出遺構

調査区の基本層序は、上から暗灰褐色土（耕作土）、暗青灰色砂質土（床土）があり、旧耕土とみられる淡青灰色砂、淡青灰色砂質土がつづき、現地表面から 0.8 ～ 0.9 m、標高 72.7 m で黄灰色粘土（地山）となる。この黄灰色粘土上面で重複する奈良時代の東西方向の溝と、溝に架けられた土橋を検出した。

東西溝は幅約 7.0 m、長さ約 30 m を検出した。溝内の堆積土は厚さ約 30cm の灰色粘土の下に砂と淡灰色～淡青灰色粘土の互層が約 20cm あり、50 ～ 80cm の深さ

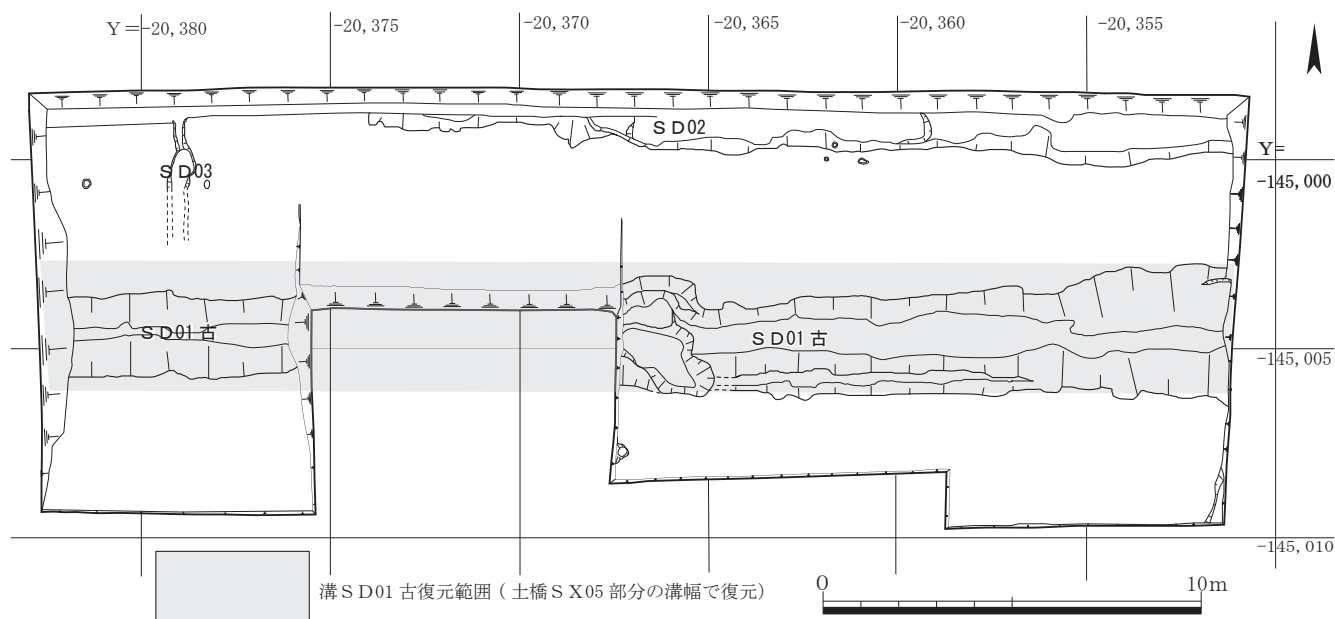


図3 古段階遺構平面図 (1/200)

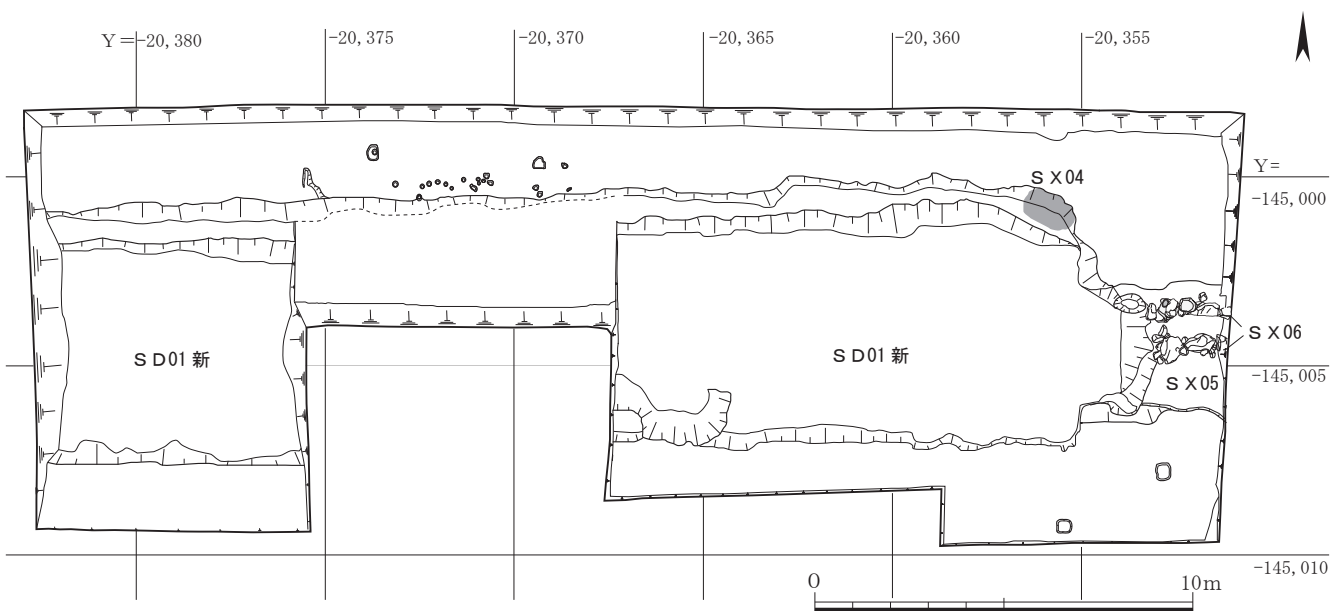


図4 新段階遺構平面図 (1/200)



写真1 発掘区全景（西から）



写真2 土層断面写真（東から）

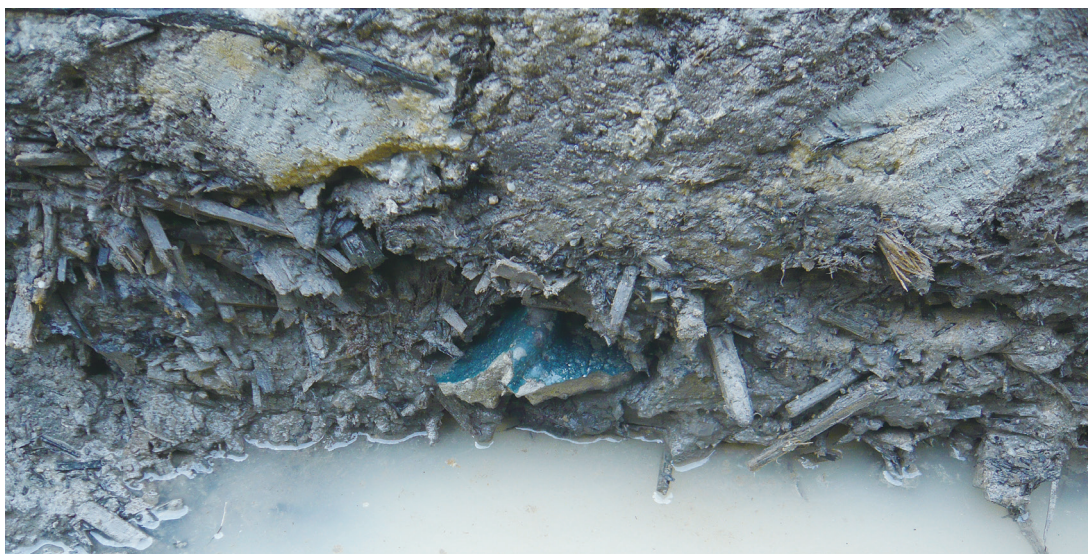


写真3 木屑層に入ったイスラム陶器（東から）

で溝底となるが、溝中央部は幅 2.0 ～ 4.0 m の幅で 60 ～ 70cm 深くなっている。この部分に大量の木屑と奈良時代の遺物を含む暗灰褐色土（10cm ～ 40cm、以下「木屑層」とする）の堆積があり、その堆積を地山の黄灰色粘土ブロックを含む粘土層（約 30 cm）によって人為的に埋め立てている状況が観察できた。一段低い溝底にも部分的に薄く灰色砂の堆積がある。溝底の標高は西端で 71.5m、東端で 71.1 m であり、西から東への水流があったことがうかがえる。木屑層の堆積は南側が厚いことから、溝南側（西南角院側）からの投棄により形成された可能性がある。後述するイスラム陶器片は、この木屑層と上層の地山の黄灰色粘土ブロックを含む粘土層（埋め立て層）から出土しており、木屑層の形成と溝の埋め立てに時間的な差はあまりないことがわかる。

調査で検出した東西溝は、位置的には右京一条三坊十三坪と十四坪の坪境小路（一条条間南小路）の南側溝に該当する可能性が高く、西大寺造営に伴い寺内区画施設としての溝を拡張する際に木屑などを投棄し、溝幅拡張で生じた土で、時間をおかず埋め立てたと考えてよいだろう。拡張後の溝は発掘区東端では幅を狭め、幅 60cm の石組溝となっており、この部分が土橋状になっていたことがわかる。なお、溝内堆積土の最上層からは、9 世紀後半に位置づけられる灰釉陶器や、9 世紀末～10 世紀初頭の土器類が出土しており、溝の廃絶時期を知ることができる。

Ⅲ. 出土遺物

溝内の木屑層からは木簡、墨書土器、瓦類、土器類、木製品、金属製品、檜皮・削屑・種子・木葉・樹枝などの自然遺物が大量に出土した。木簡、木製品、木葉・樹枝などは火を受けているものが多く、別の場所で焼却が試みられた残焼物であることがわかる。出土遺物は一括で遺棄されたもので、西大寺の造営とも関わる 8 世紀後半のまとまった遺物として注目される。以下、この溝内木屑層からの出土遺物について述べる。

木簡・墨書土器

溝内の木屑層からは 1200 点を越える木簡とその削片、約 150 点以上の墨書土器が出土した。いずれも習書が多く、戯画等を描くものもあるが、内容が判読できる木簡としては、①西大寺造営事務に関わる木簡、②西大寺の寺内組織に関わる木簡、③習書、手控え等がある。

1 は、石材を運搬するために使用した雇車二両の代金四百文の支払いに関する木簡で、裏面に支払い確認、支

払日、担当者の署名を別筆で記す。

2 は西大寺金堂の造営にあたる金堂所が足場材と見られる麻柱の借用を嶋院へ依頼した木簡で、嶋院は神護景雲元（767）年九月に称徳天皇が行幸した「西大寺嶋院」（『続日本紀』）を指すものとみられる。なお、西大寺金堂は、薬師金堂が神護景雲三（769）年頃、弥勒金堂が、宝亀二（771）年頃の完成と考えられている。この木簡は 3 片が整理作業によって同一個体であることが判明したもので、縦方向に割り裂いた後、切り折りし、焼却するといった木簡の廃棄方法をうかがうことができる。

3 は削片で、上座、寺主、都維那からなる僧職の寺内運営組織である西大寺三綱所を指すものとみられる。

4 は受戒や懺悔など戒律に関わる仏教儀礼に用いられる羯磨の語句を記した木簡で、僧侶が読み上げる部分に相当する。暗記用の習書、手控えなどの可能性があり、仏教儀礼における木簡の使用例を示す資料として貴重である。

5 も削片であるが、「太政官謹奏」とあり、太政官奏の書き出し部分であるが、公式令の書写の可能性を残す。

6 は石上宅嗣の位階官職を記したもので、石上宅嗣が造東内長官であったことを示す新資料でもある。記載された官職により、神護景雲二（768）年十月から宝亀元年（770）八月までのものであることがわかる。官職の右側に一から四の数字が振られており、位署書きの見本、控えともみられる。宅嗣は神護景雲元（767）年三月の称徳天皇西大寺法院行幸時に曲水宴に侍したこと（『経国集』巻十）が知られるが、5 の太政官謹奏木簡や「皇甫東朝」墨書土器の出土と併せて、この木簡については、称徳期の西大寺の離宮化により、太政官の一部が西大寺に一時存在していた可能性を示す資料といった評価¹⁾もなされているところである。

7 は習書が重なり、さらに割られているため、内容は不明だが、今回の出土木簡で唯一、神護景雲二（768）年という年紀を知ることができる。

8 は全長 51 cm を越える木簡で、国郡名控えとして作成されたものとみられる。片面には東海道として伊賀から始まる東海道の諸国名を記し、続いて東巽道として近江からはじまる東山道の諸国名を記し、裏面には紀国、淡路国、阿波国、土左国と南海道諸国の国名と国内の郡名を記している。東巽道といった表記については東山道の読みが「トウセンドウ」であったとする指摘がなされている²⁾。武蔵を東海道の書き込んでおり、武蔵国が東

海道に属する宝亀二（771）年以降のものとみられるが、甲斐を東巽道とするほか、志麻（志摩）、相武（相模）、火太（飛騨）、信野（信濃）、阿波（安房）、常奥（陸奥？）など、奈良時代の標準的でない表記も見られ、興味深い。

また、9は表面に「此取る人」、裏面に「法師に成る」。10には「沙弥に成る」、11には「法王に成る」と記されており、籤引具とみられる。「法王尔成」は法王道鏡の活躍期にふさわしい。

墨書土器には、土師器や須恵器の杯皿底部外面に「水」、「粥」、「寺」、「茹物所」、「口大之寺」、土師器甕胴部に「西大寺 信師」と記したものがあがるが、「官」と記すものもあり、寺（西大寺）と区別される「官」の存在が注目される。また、須恵器杯底部外面に「皇甫東朝」と人名を記すものがあり、称徳天皇に仕えた唐人皇甫東朝のこととみられる。皇甫東朝は『続日本紀』によれば、天平八（736）年に遣唐副使中臣名代に従い、波斯人李密翳らとともに来日し、天平神護二（766）年に従五位下、神護景雲元（767）に雅楽員外助兼花苑司正に任じられたことが知られる。墨書された杯は口縁部に油煙状の物質が付着しており、献灯に使用した燈明皿ともみられるが、唐人官僚の皇甫東朝の名が墨書された理由については明らかでない。時期的には文献史料から知られる活動期と合致し、8世紀の来日唐人の活動を実証する考古資

料として重要といえよう。

イスラム陶器・土器類

出土土器類は奈良時代後半期（平城宮土器Ⅳ～Ⅴ）のものが中心を占め、土師器、須恵器の杯、皿などの供膳具が多い。須恵器円面硯以外にも須恵器の杯、杯蓋、甕片の転用硯は数多く、筆ならしとしての墨痕が残る土器片も多い。イスラム陶器は木屑層とその上層の溝埋め立て層から出土した。口縁部を除く大小の破片34片が出土しているが、1個体分の破片である可能性が高い。器壁は厚く、肩部で厚さ約1cm、底部の高台直上で厚さ2cmを測る。肩部が張った器高40cm程度の短頸壺と推定される。素地は軟質で、細かい隙間が目立つ。厚さ0.5～1mmのガラス質の釉薬を内外面に施す。釉薬の色調は、外面が青緑色、内面は暗緑～暗緑黒色で部分的に青白色が混じる。肩部破片の表面には横方向の凹線間を三角に刺突して、彫り起し、凹線下部には波状文を巡らしている。小さな横耳が剥れた痕跡を残す破片もあり、三耳壺の可能性もある。

イスラム陶器は平城京では初めての出土例であり、共伴する木簡からも8世紀後半といった確実な廃棄時期を知ることができるイスラム陶器の基準資料となる。この時期に西アジアの青緑釉陶器が我が国に渡来していたことが明らかになったことは貴重な成果といえる。



写真5 イスラム陶器 破片



写真6 イスラム陶器（展示台にはめた状態）

瓦類・木製品・金属製品

瓦類は数少ないが、丸瓦、平瓦片以外には西大寺西塔所用瓦である 6139 型式 A 種の軒丸瓦、同じく西塔のものとみられる三彩方形垂木先瓦、緑釉瓦片、埴がある。木製品には人形、斎串、題籤軸、刷毛柄、箸、匙、横櫛、擬宝珠形木製品などがあり、加工材の端材、削屑も多い。木簡と同じく焼けたものが多く、木炭もめだつ。金属製品には帯金具（丸軋）、銅鋸、銅銭（和同開珎）などがある。

IV. まとめ

調査の結果、西大寺旧境内地のうち寺城南西部にあたると推定される十一面堂院とその南側の西南隅院を画する通路の南側の側溝を検出した。溝の時期は2時期に分かれ、古い堆積層には木屑層が分厚く堆積しており、そこからイスラム陶器片がまとまって出土したことは大きな成果といえよう。ほかに大量の木簡・墨書土器等の文字資料が出土した。特にその中でも注目すべきは「文人之首」と称された石上宅嗣の官位・位階を記した木簡、唐より渡来した「皇甫東朝」の銘がある墨書土器である。

う。

雑多なものが多量に投棄されている状態からみて、西大寺の主要部分の造営の終了に伴う周辺整備で発生したものではないかと考えられる。多量な木屑があったからこそ、水の流れが保たれ木簡が良好な状態で出土したのであろう。

西大寺跡第 25 次調査は奈良時代の西大寺の重要性を改めて認識させるものとなった。先述のとおり、西大寺旧境内の範囲は大半が市街化が進み、特に主要伽藍の存在が推定される部分では今後も小規模調査が見込まれる。個別の成果を蓄積し、長期的視野に立った寺域の検討が必要であるとともに、その重要性を広く人々に知っていただくことにより遺跡の保存につなげていきたいと考える。

- 1) 渡邊晃宏 2010『平城京一三〇〇年「全検証」奈良の都を木簡から読み解く』
- 2) 平川南 2010「古代史の窓－西大寺出土の木簡（上）・（下）－」山梨日日新聞 5月28日・29日記事
- 3) 1) と 7 同じ



写真7 「皇甫（甫）東朝」銘墨書土器
(撮影：奈良文化財研究所 中村一郎氏)



写真8 奈良三彩托



写真9 施釉瓦